

けいじゅヘルスケアシステム業績集 (2015) の発行にあたって

『枠を越えよう』を単年度スローガンに2015年度を進めた。『枠』は、医療や介護提供者の心の中の垣根、制度の垣根、規制の垣根、そして地域の垣根など、われわれがことをなそうとするといつも横たわる。職種や制度、地域、そして価値観の枠を越えて、地域を包括するヘルスケア事業体として、董仙会、徳充会事業を進めてきた。いわば、その『通信簿』として本業績集が位置するものとなる。

2014年度末の、ローレルハイツ恵寿の建築をもって富岡町部門における6年に及ぶ一連のリニューアル事業が終了した。

これにより2015年度年頭より、ようやくフルラインアップによる医療・介護・福祉事業、ならびにサービス付き高齢者向け住宅による生活支援事業を開始した。建設期間中やむなく閉鎖した一部病棟や機能はすべてリニューアルされたことになる。また、4月から、高齢者複合施設ローレルハイツ恵寿1階に、けいじゅファミリークリニックを恵寿ローレルクリニックとして移転させ、恵寿総合病院3病棟6階にあった血液浄化センター40床を併設させた。

3病棟6階の旧血液浄化センター跡には、『知の創造、技の熟練』を目的としたグループワークやシミュレーターによる訓練ができるKeiju Innovation Hubを10月に創設した。医療ばかりではなく介護職員、福祉職員の研修の場とすることによってわれわれの業務の標準化と質の向上を図っていきたい。さらに、医商工連携や行政、地域団体との連携の場としても利用していきたいと思う。

交通インフラの乏しい地域での高齢化は通院困難者を生む。運転免許証がなくなったとたんに、通院はタクシー代を払えるか介助者がいる場合にしかできなくなってしまう。そこで、地域経済活性化支援機構 (REVIC) (東京) やコガソフトウェア (東京) の協力の下、10月には、GPS配車システムを備えた、無料会員制送迎サービス『樂のり君』の運航を開始した。

また、ゴールデンウィークや青柏祭などの祭事期のみのお店であった小規模多機能型居宅介護施設・けいじゅ一本杉1階の「一本杉Café」は寄り合いどころとして週に1回の定期開店となった。健康講話ばかりではなく、体操や生バンド演奏、マイナンバー制度、IT講座などで好評を博している。

個人的には、2015年2月から12月までの間、内閣官房まち・ひと・しごと創生本部に設置された日本版CCRC有識者会議 (担当大臣;石破 茂地方創生大臣、座長;増田寛也氏)のメンバーとして参加した。この議論を踏まえて7月には当法人でハッピー・リタイアメント・プロジェクトを立ち上げ、都会における退職者を

シニア・イノベーターと呼称し、受け入れる事業体制を整えた。今後、当法人の地方活性化への貢献として、長い目で実行していきたく思う。

法人の主な業績では、恵寿総合病院における外来患者数は1日平均817人と対前年度比5.9%増、新入院患者数は1月平均551人と対前年度比5.2%増、手術室管理手術件数は年間1,874件（全身麻酔934件）で対前年度比5.9%増、救急搬送は年間1,630件で対前年度比6.6%といずれの指標も増加した。

恵寿金沢病院においては、外来患者数は1日平均156人と前年度と同程度であったが、新入院患者数は1月平均147人と対前年比16.6%増を数えた。

董仙会と徳充会の主に介護保険対象の高齢者施設利用者を合算すると、14年度に増床した特別養護老人ホームと新築したローレルハイツ恵寿の影響で年間入所延べ人数は、189,845人と対前年度比21.1%と大幅に伸びた。一方、短期入所では、対前年度比2.7%減、通所リハビリテーション（デイケア）で3.5%減、通所介護（デイサービス）で4.3%減となった。グループ施設間での利用者の取り合いが起きたことは否定できない。しかしながら、年度の後半から徐々に利用者増に向かっている。

高齢化、過疎化の中で、われわれの垣根のない一貫したサービスの提供に多くの住民の方々の支持をいただき、それが業績の拡大につながった。改めて地域からの支援に感謝したい。

2016年6月吉日



社会医療法人財団 董仙会

社会福祉法人 徳充会

理事長 神野 正博

